

郷土文化財紹介

神社・寺院シリーズ

<坂下神社>

「中津川市の神社名鑑」(岐阜県神社庁中津川市支部)に載る坂下神社の由緒書きには、創建年代は詳らかではないが木曾義仲公が幼少より度々参拝したという伝承から平安時代末期以前の創建と推察されとあります。主祭神は菅田別尊(ほんだわけのみこと)とされていますので八幡神社と言うことになります。義仲公が平家追討挙兵にあたり戦勝祈願を行ったとされ、これに因み「花馬」の奉納が行われるようになったと伝承されます。したがって、この「花馬」奉納行事も800年余の伝統があるとされています。



坂下神社本殿に納められる江戸時代の棟札には、坂下神社の名は一面もありません。古文書シリーズ「坂下神社の古名」で紹介しましたが、江戸時代の神社名は「十二双八幡宮」と言われていたようで、古文書には「十二双に於いて」、「十二双の森」、「十二双劇場」などの文言が見受けられます。「坂下神社」の初出は明治4年の氏子改め札に記されたものです。氏子改め札は廃仏毀釈により長昌寺が行っていた人別改めに替わるものです。これは役場



↑ 氏子改札表

ができ戸籍制度が確立されるまで苗木藩領内で行われた制度のようです。このためには、坂下村の人員を把握するにあたり中心となる神社を決めなければなりません。坂下村は三郷制を布き3人の庄屋がおり、それぞれに氏神様を護っていました。坂下村を一括管理するには坂下村にある全ての神社をあつめて一社とし全村をまとめなければならなかったのでしょうか。いわゆる神社合祀です。明治5年の行政文書「願届書留控 六区恵那郡坂下村役所」の中に、坂下村中263社の神名が掲載され最後に「右今般坂下神社江奉檣合祭候也 明治五壬申二月廿七日 第六区坂下村年寄吉村弥太郎 楯次郎七 松井惣次郎 名主曾我五郎十郎 祠官祠掌御中」と記されていることを示すものがありました。こうして江戸時代は坂下村町組の氏神様「十二双八幡宮」であり「十二双様」と親しまれた神社は、明治維新を経て坂下村産土社「坂下神社」へ呼称を替えました。

さかのぼり中世にはどのように呼称されていたのでしょうか。大変に難儀な問題ですが、あえて考察してみます。手がかりは江戸時代の呼称「十二双八幡宮」です。伝承では、この地には熊野信仰に繋がる十二社が参道脇にあったといわれ寛文元(1661)年十二社下方からの野火の延焼で失われたとされます。この時を機会に同年9月合郷へ若宮八幡神社が分社して建立されました(「若宮八幡神社の由緒」小池忠男宮司記)。そして、町組では12月に十二双八幡宮として再建さ

↓ 氏子改札裏



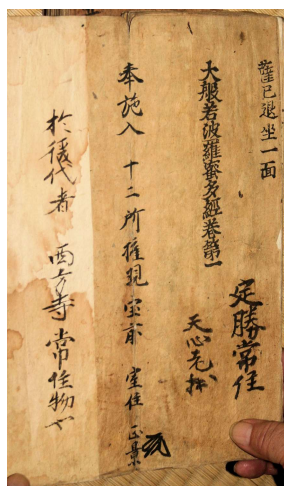
↑ 再建十二双八幡宮由緒

れました。

宝暦6(1756)年の古文書「一生懸命之田地田付山割相談相極事」では坂下村内の御百姓200名ほどが、田付山割りの21ヶ条を定め「十二双於 神前印形取之候」とし名を連ねています。また、行政文書の写しに「御達ニ基明治十二年己卯年十二月明細取調内務省ニ・・・上申置候也受持神官可知禮造記之」とあり坂下神社神号と由緒が述べられますが、そのくだりに「宮腰_ニ坂下十二社_ニ社参アリシキ」、「年々一度大祭ニ必ス花馬ヲ牽キ」などが見られ、十二双八幡宮は坂下村町組の氏神様であるのみならず坂下村での重要な場所と位置づけられていたと思われます。

先の小池忠男坂下神社宮司が記した坂下神社由緒には「神社脇を木曾西古道が走り伊那、関東への行き来には神社をお詣りした」とあります。

これらのことから、応永24(1417)年苗木遠山氏中興の祖といわれる室住正景が十二所権現宝前に奉納したとされる「大般若波羅密多經」600巻のことに触れさせてもらいます。この600巻は十二所権現から天文12(1543)年西方寺の持ち物となり天正10(1582)年には大桑村須原の定勝寺へ移動し現存しています。大般若波羅密多經巻第三の奥書には「美濃国恵奈郡遠山庄苗木郷室住村十二所権現・・・」とあります。



↑ 巻第一の奥書

現在の字名では坂下地区のどこにも「室住」というものは確認できませんが、「中津川市の神社名鑑」で見る限り坂下以外で十二所、十二社、十二双を冠する神社名も見当たりません。坂下には寺院名がその消失後に字名となって残った地域が2ヶ所あり、そこが「室住村」ではないかと推察し

ています。江戸期の十二双八幡宮の前身を十二所権現とするなら、坂下神社の創建は鎌倉時代ぐらいまではさかのぼることができるのではないのでしょうか。

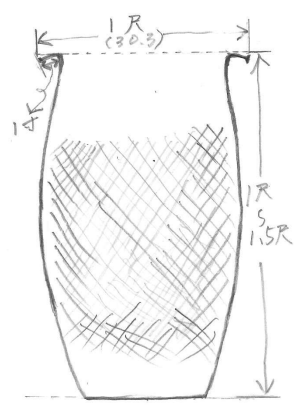
最後になりますが、坂下神社境内地はかなり古い時代から利用されていたところである証について触れます。

平成23年坂下神社境内で小さな土木工事がありました。平成24年1月その工事現場から出土したものとして須恵器の破片十点と土師器の破片九点が原寛宅へ持ち込まれました。私にも連絡が入り原寛さんと相談し、高温で焼かれ硬質で形をとどめている須恵器を中心に検討をしまとめました。専門家の鑑定を待たねばならないが、



↑ 出土した須恵器破片

破片は800年代(平安時代)に焼成された蓆目文のある甕の一部分で、写真左上の破片は甕の口縁部のです。縁の円弧を頼りに口縁の大きさを推測すると30.3糎(一尺)で、写真右下の甕の胴部の破片と思われるもののゆるい丸みと合わせて原寛さんが想定復元図を描かれました。形成は甕の内外面を蓆目状叩打器で叩きながら行ったものです。坂下地域において同類の資料は、上野本郷遺跡、氷坂遺跡、握観音畑、西方寺跡遺跡、万治屋塚などから出土しているが、西方寺跡遺跡泉藏坊地点出土の須恵器が焼成温



↑ 想定復元須恵器甕図

度からも形態的にも酷似するものと見て良いとしました。出土地点の多くはいずれも信仰と関わりを持っています。このことは現坂下神社の地点も、かなり古くからの信仰の場であったことを覗かせます。